

氏 名：安武 綾
学 位 の 種 類：博士（看護学）
学 位 記 番 号：甲第 161 号
学位授与年月日：2017 年 3 月 10 日
学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当
論文審査委員：主査 亀井 智子（聖路加国際大学教授）
副査 麻原 きよみ（聖路加国際大学教授）
副査 中山 和弘（聖路加国際大学教授）
副査 式守 晴子（聖隷クリストファー大学教授）

論 文 題 目：在宅で生活する認知症高齢者家族のソーシャルサポート尺度の開発

博士論文審査結果

在宅認知症高齢者の増加に伴い、介護する家族介護者への支援ニーズは高まっているが、介護者が認識しているソーシャルサポートを把握する手段が少ないことがこれまでの課題であった。本研究の目的は、認知症高齢者家族のソーシャルサポートを測定するための尺度を開発し、信頼性・妥当性を検討することである。

本尺度開発のために、2つの予備研究を行った。1つ目は在宅認知症高齢者を介護する家族の体験の概念化、2つ目はソーシャルサポートを探索し、尺度の概念枠組みを作成し、ソーシャルサポートの5側面、すなわち「情緒的サポート」、「道具的サポート」、「情動的サポート」、「コンパニオンシップサポート」、「承認」に、今回新たに見出した「調整的サポート」を加えた6側面による185項目のアイテムプールを作成した。専門家による表面妥当性の検討後、数回の予備的調査を行った後、認知症の人と家族の会など、在宅認知症高齢者を介護する家族介護者384名を対象に、留め置き法により調査を行い、最終的に「情緒的支援」「実用的家事介護支援」「適切な情報提供」「介護の意味づけへの支援」「レスパイトのための調整」で構成する「在宅認知症高齢者家族のソーシャルサポート尺度」の信頼性・妥当性の検討を行った。

314名から回答があった(回収率82.8%)。構成概念妥当性では、探索的因子分析により5因子20項目に精選し、確認的因子分析によりモデルの適合度を分析し、GFI 0.865、AGFI 0.823、CFI 0.854、RMSEA 0.083を得た。基準関連妥当性では、「地域住民用ソーシャルサポート尺度」により併存妥当性を分析し、有意な正の相関を確認し、信頼性はテスト再テスト法により強い正の相関を得た。また尺度全体の信頼性係数クロンバック $\alpha=0.880$ を得られたため、本尺度は信頼性・妥当性のある尺度として完成された。

審査の過程では、次の点が指摘され、修正が求められた。

- 1.調査ではすでに何等かのサポートを受けている者が対象であるが、分析には受けているサポートのバリエーションが生かされておらず、「サポートあり」・「なし」の0,1データでしか分析が行われていない。サポート資源のバリエーションや数による分析を行い、広範囲のサポートがある方が点数が高いのか、また回答者の基本的特性別の解析などを行う必要がある。
- 2.探索的因子分析を行っているが、6因子としているので当初上げた項目数よりも減ってしまっている。因子を増やすことで項目数を減らさなくてもよい場合もあるため、各因子を別々に探索し、因子が成り立っているかを検討したほうが良い。また、項目の内容を見て、確認的因子分析により精選させていく方法をとることが必要である。
- 3.今回オリジナルに加えた「調整的サポート」因子は専門職によるサポートであるため、本来のソーシャルサポートの定義がインフォーマルなサポートであることと合わなくなっている。因子の命名を全てオリジナルなものにした方が良い。
- 4.介護者の健康指標や介護負担感の外的要因を調査しているのであれば、それらを用いて、

基準関連妥当性を解析に加える必要がある。

5. この尺度はどのように使用するものにしたいと考えているのか。尺度なのか、チェックリストなのか、サポート源をカウントするものかなど、実用面や使い方を考慮する必要があり、考察にも書かれるべきである。

これらの点について、修正が行われ、審査員全員が修正は適切に行われたことを確認した。

本研究は、在宅認知症高齢者を介護する家族が認識している他者からの支援の量や種類を把握することに有用で、必要とされる資源を介護者に早期に導入する上で有用であり、介護者支援に貢献すると考えられ、発展性が期待できる研究である。

以上により、本論文は、本学学位規程第 5 条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。